

席聴傍

市議会を傍聴して

仙北市役所 市民福祉部 社会福祉課

（27年度新規採用職員） 富岡京介

仙 北市議会を傍聴させてもらい、市議会の一般質問の一連の流れについて学ばせてもらった。私自身仙北市議会を傍聴するのは初めてのことであり、良い緊張感のある質疑応答の中で農業や観光、商工業や教

育といった多種多様な各分野についての活発な意見交換がされているのを見て、とても刺激を受けた。市議会議員の皆様の質問内容は市民生活に即している具体的な質問であり、地域住民の生の声を聴くことができる機会でもあると思った。とりわけ仙北市においては人口が年々減少していることが大きな問題となっており、これに伴う市内の小・中学校の統廃合についての議論はとても注目が高かったように感じた。また、質問に答弁した後もさらにその答弁内容に踏み込んだ質問が次々とされるのを見て、答弁書を作成するときはただ質問内容に答える

でもなく、さらにその答弁書を見て内容を十二分に精査する必要性があることを改めて感じた。市議会は私たち市職員が行っている日々の業務の成果・結果を報告する市政報告の場でもあるため、地域住民の皆様にとって正しい業務が日々行われていることが示せるよう、常に「住民目線」を忘れずに職務に一生懸命取り組みたい。

編集後記

本定例会で、庁舎建設・地方創生特別委員会の2つが設置された。どちらも年度内に結論を出さなければならぬ本市の重要課題である。庁舎に関しては、合併特例債の期限があり、角館庁舎の老朽化も待たなすで、厳しい議論と選択を迫られる委員会となろう。

一方、政府は、6月30日に「まち・ひと・しごと創生基本方針2015」を閣議決定した。それによると、16年度に「新型交付金」を創設するとして、全国の自治体が15年度中に策定する「地方版総合戦略」の事業をまとめた自治体を支援（交付金支給）する内容となっている。

本市は、いち早く「地方創生特区」の指定が決まっているものの、【仙北市発】の地方版総合戦略の方向を定め策定する大事な半年間となる。今こそ正念場の時との緊張感を持ち、市民と一体となつて、あらゆる智慧を集積しながら、大事な転換期を乗り越えていきたいものである。2040年に「消滅自治体」とならない事を念頭に……

控室

声無き 不協和音

合 併協議の「難産ぶり」は

今だ記憶に生々しい。市名に並んで最重要課題が新市のシンボルと言わなければならない新庁舎の建設所だったが、当面は分庁舎方式とすることで当時先送りされた。

その後、門脇市長の諮問委員

会「みんなの庁舎検討委員会・木村一裕委員長」が検討を重ね、国道46号角館バイパス付近が至当と結論を出しており、多くの市民が地勢的にも平衡が取れ、穏当な選択と評価していたのはなかったのか。

それが昨年唐突な形で、「現在の市立角館病院の移転跡地に建設する」旨の素案が発表され、議会と市民の間に大きな波紋を呼んでいる。理由は現在の病院棟の新しい部分を残して庁舎の一部にし、建設費を圧縮すると

もさる事ながら、合併10年を経て曲がりなりにも醸し出されてきた旧町村の融和に、思いつきり冷や水を掛ける事になりはしないかと言う事だ。本定例会で素案を成案として今後の議会に諮る旨の全員協議会が開かれた

が、地域感情に直結する難しい問題だけに、この場では一言の問題も出なかった。いずれにしても今後の激しい市民人口の減少を考えると、早急に庁舎機能を一元化して行政コストを圧縮していかねば、一層の財政硬直化が避けられない。将来、市民サービスに大きな支障を来

たす事は明白だ。一部の地域には今後この案を成立させず、現状の分庁舎方式で固定させてしまおうと言う思惑もあり、微妙な状況になっている。合併特例債を充当出来る期限が迫りつつある中、寝た子を起こすようにして市民感情をささくれだたせた拳句、アブハチ取らずになる恐れもある。そうなれば角館庁舎の耐震問題等、喫緊の課題を抱えたまま庁舎問題は根底から漂流する恐れさえ出て来る。普段重要案件になれば、意見かまびすしい議員控え室もこの問題だけは誰言う

と無くタブー扱いの様になっている。

（阿部則比古記）

（熊谷一夫記）